

目指すは「もがく」ような海！？

「もがく」という言葉がありますよね。辞書を引くと「手足をばたばたさせ体をくねらせて苦しむこと」とあります。先日、ある古い小説を読んでいたら、この「もがく」という言葉に『藻掻く』という漢字を使っていました。もしかしたら「もがく」という言葉の語源は、たくさんの藻（＝海藻）が絡まって掻き分けながら必死に泳ぐさまから来たのかもしれない。そうだとすると、この言葉は昔はどこ沿岸でも当たり前のように『藻掻く』ほどの海藻があった事を物語っているのかもしれない。

森林や草原のように、海中で大型藻類が繁茂している所を藻場といいますが、近年では各地で消失、衰退が報告されています。

鹿児島で藻場を形成するのはほとんどがホンダワラの仲間、ホンダワラ類はおおまかにいうと、秋から冬にかけて成長し、春に成熟して子孫を残し、夏には枯れて根っこだけになって越冬ならぬ越夏をするという生活を送っています。海の中の景観は陸上とは正対なのです。

ところが、奄美には陸上植物と同じように夏に繁茂して秋に成熟するホンダワラ類があります。笠利町のリーフの内側に生息するタマキレバモクなどです。リーフの内側を礁池と言いますが、大潮の干潮時には水深数十cmの遠浅の海域が広がって、巨大な水溜まりのようになります。そこに南国の強烈な太陽が照りつけると水温はぐんぐん上昇して35を越える（！）事もあります。他のホンダワラ類が枯れて無くなるこの季節に、しかもお風呂のように暖かい海で、見渡す限りの広大な藻場を形成する様はまさに圧巻です。



平成13年7月18日 笠利町佐仁
タマキレバモクを主体とした藻場

ところが近年、この藻場にも異変が起っています。これだけ繁茂していた藻場が、翌年には忽然と姿を消す現象が起っているのです。しかし、全く無くなってしまったわけではなく、潜って海底を良く観察してみると、砂や他の海藻に覆われて、ホンダワラ類の根っこや新芽がたくさんある事が分かりました。実際にその次の年には再び藻場が復活したりします。環境が悪い年は海底でじっと我慢し、環境が良くなると一斉に繁茂するのかもしれない。地元のおばあさんに話を伺ったところ、昔は毎年繁茂していたとおっしゃっていましたから、昔よりも環境が厳しくなっているのでしょう。

鹿児島県水産試験場では、本年度から奄美群島の藻場造成試験に取り組んでいます。しかし、このように特殊な環境で特殊なホンダワラ類が多い奄美群島で、いかにして藻場造成を行っていくか、その難しさを痛感しています。しかし、いつか奄美のあちこちで『藻掻く』ような海が復活するよう、日々もがいて行きたいです。 （生物部 眞鍋）